

審査結果の要旨

氏名 間藤 卓

本研究は、全身性エリテマトーデスの病態を形成するにあたり、T細胞の活性化が重要な役割を果たすのでないかとの仮説に基づき、このことを検証するために、RT-PCR(reverse transcription PCR)法とSSCP(single strand conformation polymorphism)法を組み合わせたT細胞クローナリティーの検出法を用い、SLE患者の末梢血および病巣に集積するT細胞の解析を行い、以下の結果を得ている。

- 1.非活動期の長く続いた寛解状態のSLE患者末梢血においては、T細胞クローンの集積は殆ど認められなかった。
- 2.一方、増悪期のSLE患者の末梢血においては、著明なクローンの集積が多数観察されたが、T細胞クローンのTCR (T cell receptor) V β 鎖の検出頻度に偏りは認められなかった。
- 3.このT細胞クローンの集積は、病態が改善するにつれて減少を示し、クローン数と病勢には高い相関が示された。
- 4.ループス漿膜炎を呈した患者の胸水および心嚢液からは、さらに多くのT細胞クローンが検出された。検出された多くのクローンは、隔たった病巣部位に共通して存在しており、さらにその一部は末梢血にも認められた。

以上、本論文は、T細胞クローンの集積度が、SLEの活動度とよく相関すること、および、一部のT細胞クローンが、SLEの病変部位に共通に集積していることを、明らかにしており、SLEの病態の形成に対するT細胞クローンの関与を解明するにあたり、重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値すると考えられる。